The Japanese Journal of Experimental
Social Psychology. 1993, Vol. 33, No. 1, 60-69

〔原　　著〕

原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響[1)]

坪　田　雄　二
広島大学[2)]

The effect of causal attribution on social-comparison jealousy

Yuji Tsubota (*Hiroshima University*)

The present research investigated the effect of causal attribution on social-comparison jealousy. A pilot study showed that causes attributed in jealousy-provoking situation were categorized in terms of the following three dimensions: internality, stability, and direction of cause. In study 1, 256 female students assessed the feelings of jealousy on six emotion adjectives in two hypothetical jealousy-provoking situations, in which the dimensions of cause were manupulated. The result showed that only the dimension of internality among the three dimensions was related to jealousy, i. e., social-comparison jealousy was aroused in greater degree the by external attribution than by internal attribution in two situations. In study 2, 57 female students participated and assessed their locus of control and strength of jealousy in the two situations. The result showed externals exhibited more jealousy than internals in one situation. These results suggest that external attribution causes social-comparison jealousy, but that the effect varies depending upon importance of situation.

Key words: jealousy, causal attribution, locus of control, internality, stability

問　　題

現代社会は，以前の社会にみられた身分や階級などの社会制度が崩壊し，全ての人間が対等になる平等社会となっており，わが国でも国民の多くが中流意識を持つといわれている。このような平等社会においては，他者と対等であるが故に，以前の社会では感じることのなかった嫉妬を感じるようになっており，嫉妬感情が対人関係における重要なキー・ワードのひとつになってきているように思われる。岸田 (1987) は，「日本の現代は，歴史上かつてなかったほどの嫉妬とはしゃぎの時代となり，われわれはおたがいのあいだで休むひまなく嫉妬に狂い，はしゃいで目立つ競争をしているようである (P. 6)」とも述べている。

このような嫉妬感情は，暴力的，あるいは復讐的な行動に結びつきやすい感情であり，一般的には対人関係に悪い影響を及ぼすものである。Bers & Rodin (1984) は，この嫉妬感情を次の2つのタイプに分類している。ひとつは，恋愛関係における嫉妬やきょうだい間の嫉妬などのように，特定の他者との既存の望ましい関係が，

1）本研究の一部は，日本社会心理学会第32回大会で発表したものである。本論文を作成するにあたり，ご指導，ご助言くださいました広島大学教育学部吉森護教授，深田博己助教授に深く感謝致します。
2）現所属　高松短期大学

第三者によって脅かされると認知した時に生じる不快な感情であり，もうひとつは，自分の業績や地位などの何らかの次元において，自分の方が優位か同等である，あるいはそうあるべきだと思っているにもかかわらず，実際には他者の方が優位に立っていると認知した時に生じる不快な感情である。前者のタイプの嫉妬を，社会的関係に関する嫉妬(social-relations jealousy)，後者のタイプの嫉妬を社会的比較によって生じる嫉妬（social-comparison jealousy)と呼んでいる。前者のタイプの嫉妬については，これまで恋愛関係における嫉妬を中心として多くの研究が行われ，嫉妬感情の構造，嫉妬の強さに影響を与える要因，嫉妬の生起プロセス，嫉妬の効果，影響などに関して多くの知見が得られているが（Clanton & Smith, 1977 ; White & Mullen, 1989)，後者のタイプの嫉妬に関しては，最近になって検討され始めたため，以下にあげるように，研究例は比較的少ない。本研究は後者のタイプの嫉妬感情について検討したものである。

これまでの社会的比較によって生じる嫉妬に関する研究で明らかにされたことをまとめると次のようになる。

①6～11歳の子供では，年齢の低い者，自尊心の低い者は嫉妬感情が強い。年齢の低い者では，自分が劣勢である次元の重要性には影響されないが，年齢の高い者では自分が劣勢である次元の重要性が高いほど，嫉妬感情が強い（Bers & Rodin, 1984)。

②自分と類似している他者が，自分にとって重要な次元で優位な場合に嫉妬が強い（Salovey & Rodin, 1984)。また自分と比較他者との親密度にかかわりなく，重要な次元で他者が優位な場合に嫉妬感情が強い（Tesser & Collins, 1988)。

③社会的比較によって生じる嫉妬と恋愛関係における嫉妬の比較では，嫉妬それ自体の強さに違いはないが，後者の方が怒りや抑鬱の感情要素が強い（Salovey & Rodin, 1986)。

④嫉妬を感じた場合の対処法に関しては，怒りや悲しみなどを我慢する方略（self-reliance strategy）を用いやすい者ほど，嫉妬状況で感じる嫉妬感情が弱い（Salovey & Rodin, 1988)。

従来の研究は，Tesser & Campbell (1982) の自己評価維持モデル（self-evaluation maintenance model）をもとに検討されたものが多いため，嫉妬感情の強さに影響する要因として検討された変数は，年齢と自尊心以外は，比較次元の重要性（relevance)，自分と他者の親密度（closeness）といった，このモデルで考慮されている変数だけであり，いまだ多くの要因が未検討のままである。同じ状況におかれても，人によって感じる嫉妬の強さは異なることから，上記以外の要因，特に，当該の状況に対する認知の様式が嫉妬の生起に重要な役割をはたしていると思われる。

これまでの嫉妬以外の対人感情についての研究では，原因帰属と感情との関連性を検討したものが見られる。例えば，中村(1986)は孤独感と帰属の関係を，桜井(1988)は絶望感と帰属の関係を検討し，いずれも帰属された原因の種類によって感じる感情の強さに違いがあることを報告している。また，Weiner (1986) は，得られた結果に対する原因帰属と喚起される感情との関連性を検討し，帰属された原因の種類によって規定される感情（帰属依存感情；attribution dependent affect）があることを報告しており，わが国でも奈須・堀野（1991）が同様の結果を報告している。以上のことから，社会的比較によって生じる嫉妬も，帰属された原因の種類に影響を受けることは充分に考えられることである。

そこで，本研究では，他者が自分よりも優位に立った原因の帰属が，社会的比較によって生じる嫉妬に与える影響について検討することとした。ところで，両者の関係を検討する際，他者が自分よりも優位に立った事態の原因としてどのようなものがあげられるかを明らかにする必要がある。そこで，嫉妬状況における原因帰属の様式を明らかにすることを目的として予備調査を行った。

予　備　調　査

社会的比較によって生じる嫉妬の定義に従って，架空ではあるが誰でも遭遇しそうな嫉妬状況を設定し，被験者に呈示した。そして，そのような状況（他者が自分よりも優位に立った状況）に至った原因を推測させ，想定される原因を収集した。

方法

被験者　専門学校女子生徒55名。

手続き　社会的比較によって生じる嫉妬の定義に従って嫉妬状況を作成した。その際，比較次元の重要性が嫉妬感情の強さに影響するという従来の研究結果（Bers & Rodin, 1984 ; Salovey & Rodin, 1984 ; Tesser & Collins, 1988）を参考にし，被験者である学生にとって重要であると思われる就職場面とそれに比べて重要性の低いと思われるスポーツ場面の2種類の重要性の異なる場面を用いた。また，比較対象を誰にするかによっても嫉妬感情の強さは異なると思われるが，本研究では，比較対象の要因は友人と設定することで恒常化して場面を設定した。そして，この状況を被験者に呈示し，それぞれの

場面で，他者が優位に立った（一方のみが就職試験に合格，あるいは一方のみがスポーツの試合で勝利）原因として考えられるものを，思いつく順に3つ記述させた。

結果および考察

それぞれの場面ごとに収集された165個の自由記述をみると，内在性と安定性の2次元を用いたWeinerの初期の帰属研究（Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest & Rosenbaum, 1971）の分類カテゴリー（能力，努力，運，課題の困難度）にあてはまるものが多くみられた。そこで予備調査で得られた自由記述を，上記の4カテゴリーと「その他」の計5つのカテゴリーで分類することにした。その結果を示したのがTable 1である。なお，全体の3分の1の原因について，2名の評定者が独立に各原因の分類を行い信頼性を検討したところ，両者の分類の一致率は就職場面で.89，スポーツ場面で.93であった。

Table 1の結果からわかるように，自由記述された原因のうち，就職場面では7割から8割の原因が，スポーツ場面では8割から9割の原因が，Weinerの原因帰属の分類にあてはまるものであり，このことから嫉妬状況において他者が優位に立った原因の分類として，「原因の内在性」と「原因の安定性」の2次元が使用可能なものであることが示された。

ところで，自由記述の内容をみると，同じカテゴリーに分類された原因でも，その原因の方向が異なるものが，特に「努力」カテゴリーにおいて多くみられた。すなわち，同じ努力の違いであっても，「自分の努力が足りなかったから」と記述する場合と，「相手の努力がまさっていたから」と記述する場合である。これは，単に書き方だけの問題であるかも知れないが，客観的には同じ事象のことを，自分のせいだと考えるか，相手のせいだと考えるかによって，その後の反応，特に，嫉妬などの感情的な反応に対して影響することは充分考えられることである。そこで，このように原因の主体を自分と他者のいずれかにするスタイルを「原因の方向」と命名し，原因を分類する次元のひとつとして加えることにした。

以上のように，予備調査の結果から，嫉妬状況において他者が自分より優位に立った原因として，「原因の内在性」，「原因の安定性」，「原因の方向」の3つの次元が考えられることが判明した。そこで，これら3次元を考慮して研究1を実施した。

Table 1
自由記述された原因の分類

	能力	努力	運	課題の困難度	その他
就職場面	21.8	38.2	3.6	18.2	18.2
	28.5	22.4	5.5	17.0	26.7
スポーツ場面	27.3	56.4	3.6	7.3	5.5
	29.1	40.6	7.3	4.8	18.2

上段は第一反応のみの分類(n=55)，下段は3つの反応の分類（n=165)。数値はそれぞれの場面において占める割合（%)。

研　究　1

研究1では，上記の3次元を用いて操作した帰属情報を含んだ状況文を作成し，それぞれの状況において感じる嫉妬の強さを測定する方法により，原因帰属の種類がその状況において感じる嫉妬感情の強さに及ぼす影響について検討した。

両変数間の関係については，以下のことが予測される。

①他者が自分より優位に立った原因を，「能力」や「努力」に帰属した場合，「運」や「課題の困難度」に比べて，とてもかなわないとか，もともと力が足りなかったから仕方がないといったあきらめの態度につながりやすいと思われる。このように，他者に対する競争をあきらめてしまえば，嫉妬感情にはつながりにくい。そのため，「原因の内在性」と嫉妬感情の関係の様相は，外的な原因に帰属するほど嫉妬感情が強いことが予想される。

②他者が自分よりも優位に立った原因を，安定的な原因に帰属した場合には将来においてもその原因は存在し，そのため今後も自分が劣勢のままである可能性が高いと思われる。このように，将来においても自分が優位に立てる可能性が少ない場合には，あきらめの態度につながりやすいことが予想される。そのため，「原因の安定性」と嫉妬感情の関係の様相は，不安定な原因に帰属するほど嫉妬感情が強いことが予想される。

③他者が優位に立った原因を，自分の側の原因に帰属した場合には自分の方向に注意が向いているが，他者の側の原因に帰属した場合には他者の方向に注意が向いていると思われる。また，嫉妬感情とは比較他者に対して抱かれる感情である。このことを考え合わせると，注意が他者の方向に向いている場合に，当該の他者に対する感情は生起しやすいことが予想される。そのため，「原因の方向」と嫉妬感情の関係の様相は，他者の側の原因に帰属するほど嫉妬感情が強いことが予想される。

方法

独立変数　原因の内在性(2)×原因の安定性(2)×原因の

方向(2)。これらの変数はすべて被験者間変数とした。そして，予備調査と同様の2つの場面を設定した（Table 2)。

被験者　短大生女子256名。

手続き　登場人物よりも他者の方が優位に立っている2つの状況を用いたが，その際，状況文には，そのような状況に至った原因を登場人物がどのように考えているかについての帰属情報を呈示した（Table 3)。なお，2つの場面について呈示する帰属情報は同一被験者には同じ条件の帰属情報を呈示した。そして，それらの状況下では，登場人物が嫉妬や怒りなどの感情をどの程度感じていると思うかを想定させて回答させる質問紙法を用いた。その場合，自分のこととしてではなく，他者の感情を想定させる手法を用いたのは，本研究で検討している嫉妬感情が，他者の前で表明しにくい感情であることを考慮したためである。

従属変数　ねたましさ，嫉妬，怒り，うらやましさ，不安，悲しみ，自尊心の侵害といった，嫉妬感情にかかわる7つの感情について，6段階単極性尺度を用いて回答させた。主たる従属変数である嫉妬については，嫉妬とねたましさの2つの項目を用いた。また，怒りから悲しみまでの4つの感情は，これまでの研究で，複合感情である嫉妬の下位感情として指摘されている感情の中から選択した（Salovey & Rodin, 1986)。自尊心の侵害は，恋愛関係における嫉妬の原因として自尊心喪失の恐れがあげられており（Mathes, Adams & Davies, 1985)，これが，社会的比較によって生じる嫉妬の原因としてどの程度考えられるものかを検討するための予備的資料を得るために回答させることにした。

結果

各従属変数について，得点が高いほど感情喚起や自尊心の侵害が強くなるように，1～6点に得点化して平均値を求めた。次に，2つの場面，それぞれにおいて各条件間に違いがあるかどうかを検討するため，それぞれの従属変数について，原因の内在性(2)×原因の安定性(2)×原因の方向(2)の3要因の分散分析を行った。

1．自尊心の侵害

分散分析の結果，両場面ともに，原因の内在性の主効果のみが有意であり，内的次元よりも外的次元に帰属された場合の方が自尊心の侵害が強いことが示された（Table 4)。

2．各感情の喚起される程度

分散分析の結果，両場面ともに，内在性の主効果がみられたのは，ねたましさ，嫉妬，怒りであり，いずれも自尊心の侵害と同様，外的次元に帰属された場合の方がそれぞれの感情が強くなっていた（Table 4)。また，うらやましさについては，就職の場面において，原因の方向の主効果がみられ，他者の側の原因に帰属された場合

Table 2
実験で用いた場面

＜就職場面＞

AさんとBさんは，仲の良い同性の友達です。ふたりは，ファッション業界に関心があり，Aさんはファッションメーカーのα社に，Bさんはファッションメーカーのβ社に採用試験を受けに行きました。Aさんはα社に入るために，ファッション業界についてある程度勉強していたので，『Bさんが不採用になることはあっても，自分が不採用になることはないだろう』と思っていました。ところが，採用試験の結果，Bさんはβ社に内定をもらったのですが，Aさんは不採用になってしまいました。

このような結果になったのを，Aさんは『……』と思いました。

＜スポーツ場面＞

AさんとBさんは，仲の良い同性の友達です。彼らは違う会社に勤めていますが，ふたりともテニスが好きで，同じテニスクラブに入りました。しばらくしてから，ふたりのそれぞれの職場でテニス大会が開かれました。Aさんは，仕事の関係で毎日はできませんでしたが，週のうち3日は練習していたので，『Bさんが負けることはあっても，自分が負けることはないだろう』と思っていました。ところが，Bさんは大会で優勝し，自分は一回戦で負けてしまいました。

このような結果になったのを，Aさんは『……』と思いました。

『……』内にTable 3の帰属情報を挿入して使用。

Table 3
実験操作に用いた帰属情報

＜就職場面＞	
内・安・自	自分の能力が足りなかったからだ
内・安・他	相手の能力が高かったからだ
内・不・自	まだまだ自分の努力が足りなかったからだ
内・不・他	自分以上に相手が努力していたからだ
外・安・自	自分の受けた会社の採用人員が少なく，競争率が高かったからだ
外・安・他	相手の受けた会社の採用人員が多く，競争率が低かったからだ
外・不・自	たまたま運が悪かったからだ
外・不・他	たまたま相手の運が良かったからだ
＜スポーツ場面＞	
内・安・自	自分の運動能力が素質的に劣っていたからだ
内・安・他	Ｂさんの運動能力が素質的にまさっていたからだ
内・不・自	まだまだ自分の練習量が足りなかったからだ
内・不・他	Ｂさんの練習量がまさっていたからだ
外・安・自	自分の職場のテニス大会のレベルが高かったからだ
外・安・他	Ｂさんの職場のテニス大会のレベルが低かったからだ
外・不・自	たまたま運が悪かったからだ
外・不・他	たまたまＢさんの方が運が良かったからだ

内：内的原因　安：安定的原因　自：自分の側の原因
外：外的原因　不：不安定な原因　他：他者の側の原因

Table 4
場面ごとの内在性，安定性，原因の方向における各感情の平均値と標準偏差

	就職場面									スポーツ場面								
	内在性の次元			安定性の次元			原因の方向			内在性の次元			安定性の次元			原因の方向		
	内的	外的	*F*値	安定	不安定	*F*値	自分	他者	*F*値	内的	外的	*F*値	安定	不安定	*F*値	自分	他者	*F*値
嫉妬	4.23	4.56	*4.63**	4.41	4.37	*<1*	4.31	4.48	*1.26*	4.00	4.41	*5.82**	4.23	4.17	*<1*	4.16	4.25	*<1*
	(1.19)	(1.22)		(1.19)	(1.25)		(1.22)	(1.22)		(1.35)	(1.31)		(1.29)	(1.42)		(1.27)	(1.42)	
ねたましさ	4.34	4.80	*10.86***	4.63	4.50	*<1*	4.51	4.63	*<1*	3.95	4.52	*13.07***	4.34	4.14	*1.53*	4.21	4.27	*<1*
	(1.20)	(1.02)		(1.14)	(1.13)		(1.08)	(1.19)		(1.32)	(1.18)		(1.27)	(1.29)		(1.30)	(1.27)	
怒り	2.87	3.40	*11.62***	3.23	3.03	*1.70*	3.02	3.25	*2.26*	2.84	3.38	*11.74***	3.09	3.13	*<1*	2.98	3.23	*2.69*
	(1.33)	(1.14)		(1.29)	(1.24)		(1.24)	(1.28)		(1.38)	(1.12)		(1.31)	(1.26)		(1.22)	(1.34)	
うらやましさ	4.89	4.94	*<1*	4.94	4.89	*<1*	4.79	5.04	*3.87**	4.44	4.38	*<1*	4.45	4.36	*<1*	4.38	4.44	*<1*
	(1.07)	(0.95)		(1.03)	(0.99)		(1.07)	(0.93)		(1.23)	(1.24)		(1.21)	(1.26)		(1.29)	(1.18)	
不安	4.40	4.40	*<1*	4.23	4.56	*4.53**	4.41	4.38	*<1*	2.79	2.85	*<1*	2.80	2.84	*<1*	2.95	2.70	*2.00*
	(1.25)	(1.23)		(1.41)	(1.01)		(1.13)	(1.34)		(1.37)	(1.46)		(1.44)	(1.38)		(1.46)	(1.36)	
悲しみ	4.57	4.36	*1.58*	4.42	4.52	*<1*	4.44	4.51	*<1*	3.61	3.49	*<1*	3.55	3.56	*<1*	3.52	3.58	*<1*
	(1.18)	(1.29)		(1.34)	(1.13)		(1.20)	(1.28)		(1.37)	(1.41)		(1.40)	(1.39)		(1.38)	(1.41)	
自尊心の侵害	4.02	4.42	*6.53**	4.21	4.23	*<1*	4.24	4.20	*<1*	3.97	4.59	*14.58***	4.19	4.38	*1.31*	4.33	4.23	*<1*
	(1.35)	(1.15)		(1.30)	(1.24)		(1.28)	(1.26)		(1.32)	(1.27)		(1.35)	(1.31)		(1.33)	(1.33)	

（　）内の数値は標準偏差。*F*値の自由度は（1,248）である。$^{*}p<.05$　$^{**}p<.01$

の方が，うらやましさが強く（Table 4），スポーツ場面では内在性と原因の方向の交互作用効果（$F_{(1,248)}=8.10$, $p<.01$）がみられ，下位検定の結果，内的次元で他者の側の原因の場合，つまり，自分が劣勢になったのは相手の能力が高い，あるいは努力がまさっていたからだと帰属した場合にうらやましさが強くなっていた（Table 5）。そして，不安については，就職場面で，安定性の主効果，内在性と安定性の交互作用効果（$F_{(1,248)}=4.11$, $p<.05$）がみられ，不安定な次元で不安が強く，外的次元においてその傾向が強いことが示された（Table 6）。一方，スポーツ場面においては安定性と原因の方向の交互作用効果（$F_{(1,248)}=4.49$, $p<.05$）がみられ，安定次元において自分の側の原因の場合，つまり，自分が劣勢になったのは自分の能力が劣っていた，あるいは自分が取り組んだ課題が難しかったからだと帰属した場合に不安が強くなっていた（Table 7）。

3．各従属変数間の関連性の検討

本研究で用いた7つの従属変数間の関連を検討するため，2つの場面ごとに各従属変数間の相関係数を求めた（Table 8）。その結果，21の相関係数のうち，就職場面で17，スポーツ場面で19の有意な正の相関がみられた。また，嫉妬，ねたましさ，怒り，自尊心の侵害の間には，両場面ともに比較的強い正の相関があり，不安と悲しみの間にも就職場面で.378，スポーツ場面で.443の相関がみられた。

考察

研究1においては，「原因の内在性」，「原因の安定性」，「原因の方向」の3次元を用いて帰属情報を操作し，その際の嫉妬感情の強さを測定する方法で，原因帰属が嫉妬の喚起に与える影響を検討した。その結果，「原因の内在性」については，能力や努力といった内的原因よりも，運や課題の困難度といった外的原因の場合に，嫉妬，ねたましさ，怒りの感情が強くなっており，初期の予測通りの結果となっていた。しかし，「原因の安定性」と「原因の方向」については，就職場面の不安やうらやましさにおいて予測通りの結果がみられたが，嫉妬やうらやましさの感情は，これらの次元によって影響を受けていなかった。以上のことから，原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響は，原因の次元によって異なり，本研究で用いた次元に限っていえば，「原因の内在性」のみが嫉妬感情の喚起に影響を与える次元であるといえそうである。

研究2では，外的帰属が嫉妬感情を強く喚起させるという結果の信頼性を検討するため，研究1とは異なる方法によって，「原因の内在性」と嫉妬感情の関係を検討することとした。

Table 5
スポーツ場面における内在性×
原因の方向ごとのうらやましさ

	内的	外的
自　分	4.19	4.56
	(1.30)	(1.26)
他　者	4.69	4.19
	(1.10)	(1.20)

表中の数値は平均値，（　）内の数値は標準偏差。

研　究　2

研究2では，個人の持つ帰属傾向と呈示された状況で感じる嫉妬感情の強さとの関連性から，原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響を検討する。この両変数の関連性を検討したのは，以下のような過程が考えられるためである。すなわち，外的な帰属傾向を持つ者は，ある特定の状況において行う原因帰属におい

Table 6
就職場面における内在性×
安定性ごとの不安

	内的	外的
安　定	4.39	4.01
	(1.45)	(1.35)
不安定	4.41	4.72
	(1.00)	(1.01)

表中の数値は平均値，（　）内の数値は標準偏差。

Table 7
スポーツ場面における安定性×
原因の方向ごとの不安

	自分	他者
安　定	3.11	2.48
	(1.52)	(1.29)
不安定	2.78	2.91
	(1.38)	(1.39)

表中の数値は平均値，（　）内の数値は標準偏差。

ても外的な原因に帰属しやすいと思われる。そのため，研究1でみられたように外的帰属が嫉妬感情を喚起するのであれば，外的帰属傾向の強い者は，そうでない者に比べて，より強い嫉妬感情を報告するという過程が想定されるためである。

方法

被験者　専門学校生女子57名。

手続き　研究1で用いた嫉妬状況から，帰属情報をのぞいた状況文を被験者に呈示し，以下の従属変数について回答させた。なお，研究1では，他者の感情状態の推測という手法を用いたが，研究2では，被験者個人の帰属傾向との関連性を検討するため，他者の感情の推測ではなく，状況文のような事態に自分がおかれた場合，どのように感じるかを回答させた。そして，個人の持つ帰属傾向の測定尺度としては，鎌原・樋口・清水（1982）のLOC尺度を用いて測定した。

従属変数　研究1で用いたものと同じ。これらの変数に加え，それぞれの状況において，他者が自分よりも優位に立った主な原因として考えられるものひとつを記述させた。そして，記述された原因の内在性と安定性の程度を，Peterson, Semmel, Bayer, Abramson, Metalsky & Seligman (1982) の帰属スタイル尺度の測定方法にならって，8段階両極性尺度を用いて回答させた。

結果

LOC尺度については，得点が高いほど内的統制型を示す方向で得点化し，各感情については，得点が高いほど感情喚起が強くなる方向に，原因の内在性は得点が高いほど内的な方向に，原因の安定性は得点が高いほど安定的な方向に得点化した。

そして，個人の持つ帰属傾向と嫉妬状況で帰属された原因の特性との関連を検討するため，2つの嫉妬場面ごとに，LOC得点と原因の内在性得点あるいは安定性得点とのPearsonの積率相関係数を算出した。その結果，LOC得点と内在性得点との間には，就職場面で *.228*($p<.10$)，スポーツ場面で *.233*($p<.10$)の関係がみいだされたが，安定性得点との間には，両場面とも有意な相関はみられなかった（就職場面 *.096*，スポーツ場面 *.060*）。このことから，内的統制型の者は嫉妬状況においても内的な原因に，外的統制型の者は外的な原因に帰属しやすい傾向にあるが，これらの個人特性と嫉妬状況における

Table 8
各従属変数間の相関係数

	嫉妬	ねたましさ	怒り	うらやましさ	不安	悲しみ	自尊心の侵害
嫉　妬		.696**	.615**	.159*	.132*	.142*	.630**
ねたましさ	.671**		.600**	.192**	.224**	.171**	.568**
怒　り	.499**	.533**		.044	.213**	.256**	.579**
うらやましさ	.261**	.307**	.125*		.131*	.151*	.004
不　安	.062	.053	.009	.205**		.443**	.230**
悲しみ	.159*	.131*	.211**	.197**	.378**		.159*
自尊心の侵害	.493**	.537**	.456**	.286**	.027	.178**	

右上がスポーツ場面，左下が就職場面。$n=256$　$^{**}p<.01$　$^{*}p<.05$

Table 9
LOC得点と各感情との相関係数

	嫉妬	ねたましさ	怒り	うらやましさ	不安	悲しみ	自尊心の侵害
就職場面	−.315*	−.302*	−.236	.095	.050	.206	−.217
スポーツ場面	−.082	.077	−.186	−.107	.054	.192	−.187

$n=57$　$^{*}p<.05$

原因の安定性との間には関連がないことが示された。

次に，各感情と帰属傾向の関連性を検討するため，2つの嫉妬場面ごとに，両変数間のPearsonの積率相関係数を算出した（Table 9）。その結果，就職場面における嫉妬，ねたましさとLOC得点の間に有意な負の相関がみられ，就職場面において，外的統制型の者は嫉妬やねたましさの感情が強いことが示された。

全体的考察

まず最初に，本研究における方法論的な問題点について述べておく。本研究は嫉妬という対人感情について検討したが，嫉妬感情そのものを直接検討したものではなく，仮想法を用いて，人が嫉妬感情について持つ認知を扱ったものである。そのため，実際の感情レベルのものとは異なるかもしれない。しかし，Shaver，Schwartz，Kirson & O' Conor (1987) は，愛情や喜びのような基本的な感情は，発生条件や反応形態などがスキーマ化されていることを明らかにしている。このように，人は感情についてのスキーマを持っており，このようなスキーマが，実際の対人場面での感情喚起にも影響していると思われる。そのためにも，まず最初に嫉妬感情に対して認知面からの検討を行い，人が嫉妬感情に対して持つスキーマを明らかにしていくことは充分に意味があるものだと思われる。そこで，本研究では，嫉妬感情に対して認知面からの検討を行ったのである。以上のことをふまえた上で以下の考察をすすめることにする。

研究2では，個人の持つ帰属傾向と嫉妬状況で感じる嫉妬の強さの関連性の観点から，外的帰属によって嫉妬感情が強く喚起されるという関係について検討した。その結果，スポーツ場面においては両者の間に関係はみられなかったが，就職場面において，外的統制型の者ほど嫉妬とねたましさの感情が強いという関係がみいだされた。そして，個人の持つ帰属傾向と嫉妬状況で帰属した原因の特性との関連からは，内的統制型の者は本研究で用いた嫉妬状況においても内的な原因に，外的統制型の者は外的な原因に帰属するが，「原因の安定性」とは関連がないことが示された。以上のことをまとめると，ある状況においては，外的な原因に帰属することによって嫉妬感情は強く喚起されるといえるであろう。それでは，ある状況とは，一体どのような状況なのであろうか。本研究で用いた2つの状況を比較すると，スポーツにおける優劣よりも就職における優劣の方が，被験者にとって非常に重要な問題であると思われる。このような，従来の研究（Bers & Rodin, 1984；Salovey & Rodin, 1984；Tesser & Collins, 1988）で指摘されてきた。状況の重要性の違いという要因が影響している可能性が考えられる。ただし，本研究で用いた2つの状況が，重要性の次元だけで異なるとは言い切れない。そのため，状況のどのような特性がこのような違いを生じさせたのかについては，状況の重要性も含めてそれぞれの状況の特性を吟味し，それらの特性が原因帰属と嫉妬感情の喚起に与える影響について検討することによって明らかにされる問題であろう。

また，同じスポーツ場面を用いても，研究1では原因帰属と嫉妬感情に関連がみられたが，研究2では両者の間に関連はみられなかった。これは，回答方法の違いによって生じたのではないだろうか。研究1では他者の感情を推測させるというインパーソナルな回答形式を用い，研究2では自分が当該の状況におかれた場合の感情を回答させるというパーソナルな回答形式を用いた。そのため，研究2では状況の特性の影響を受けやすかったのではないかと推測される。

ところで，社会的比較によって生じる嫉妬感情の原因として自尊心の侵害がどの程度考えられるかについても検討した。その結果，研究1では，帰属情報による自尊心の侵害の程度の変化と同方向の変化が，嫉妬，ねたましさ，怒りの感情でみられており，研究2の就職場面では，自尊心の侵害と帰属傾向の間に有意な関連性は見いだせなかったが，嫉妬，ねたましさと帰属傾向の関係と同方向の関連性を示していた。このように，嫉妬感情と自尊心の侵害は常に同じ方向の共変化を示していた。このことは，単なる疑似相関であるかもしれないが，嫉妬感情の喚起に自尊心が関係していることを示す可能性もある。事実，Bers & Rodin (1984) は，自尊心の低い子供は嫉妬が強いことを示している。今後，嫉妬感情が喚起されるプロセスを検討する上で，自尊心との関係を検討していくことが重要であろう。

本研究では，これまでの嫉妬感情に関する研究において嫉妬感情の下位感情として指摘されている4つの感情についても検討を行った。その結果，悲しみの感情だけは，原因帰属のいずれの要因とも関連性はみられなかった。これは，悲しみの感情がWeiner (1986) の言う帰属依存感情ではなく，自分が他者よりも劣っているという結果の性質そのものによってもたらされる結果依存－帰属独立感情（outcome dependent-attribution independent affect）である可能性を示す結果であろう。これら4つの感情は，従来の研究では複合感情である嫉妬の下位感情として指摘されている感情ではあるが，状況の結果そのものに起因する感情と，その状況に対する認知に

起因する感情といった観点を導入し，嫉妬感情の下位感情についての再吟味を行うことも必要であろう。

そして，本研究では，自分が他者より劣っている状況の原因認知とその際の嫉妬感情の喚起の程度との関連性を検討する上で，まず最初の段階として，原因の内在性，安定性，原因の方向の3つの次元を用いた。しかし，これまでの帰属研究からは，これら以外の次元，例えば，意図性などの次元も指摘されており（Weiner, 1986），これら未検討の原因次元と嫉妬感情の関連についても検討する必要があろう。それとともに，研究1では，各次元の組み合わせによる8つの原因を単独に扱って検討した。しかし，日常場面では，各原因を単独で考えるよりも原因を組み合わせて考えることが多いと思われる。つまり，これは自分が他者より劣った状況の原因を，「努力が足りなかった」といったような単独の原因だけで説明しようとするのではなく，「自分の能力も足りなかったし，運も悪かった」といった原因の組み合わせで説明しようとする考え方である。今後の研究では，それぞれの原因を組み合わせて，嫉妬の喚起との関連性を検討していく必要もあるだろう。また，本研究では原因帰属が社会的比較によって生じる嫉妬感情に与える影響に関して検討を行った。しかし両者の関係を考える場合，自分が他者より劣っている状況の原因をどのように考えるかが，感じた嫉妬の強さによって異なるという逆方向の影響も考えられる。すなわち，嫉妬感情への対処法としての原因帰属という考え方である。このような方向での両者の関係も今後の検討課題であろう。

最後に，本研究では取り上げなかったが，嫉妬感情の喚起を検討する上で重要な要因についてまとめておく。ひとつは性差の問題である。これまでの恋愛関係における嫉妬の研究では，一貫した方向ではないが，性によって嫉妬感情の強さが異なることが報告されている（Bringle & Buunk, 1985 ; White, 1989 など）。そのため，本研究では検討しなかった性の要因が，原因帰属と嫉妬感情の関係にどのような影響を与えるのかを検討する必要があろう。次に，本研究では比較対象を友人と恒常化したため，検討できなかった比較対象の問題があげられる。比較した他者がどのような人物なのかによって，その際の原因帰属の様式も異なるであろうし，また，その後の嫉妬感情も左右されるであろうと予想される。そのため，比較他者の要因が原因帰属と嫉妬感情の関係に与える影響についても今後の検討課題となろう。また，上記の比較他者の要因とも関連する問題であると思われるが，比較の機能の問題も考えられる。すなわち，何のために他者と自分を比較しているのかという問題である。単に自己評価のために他者と比較する場合と，自己高揚のために他者と比較する場合を比べてみると，同じように自分が劣勢であっても，より脅威を感じるのは後者の方である。このように，比較の機能によって同じように劣勢であっても当事者に与える影響は異なると思われる。このような比較の機能と嫉妬感情との関連も検討すべき課題であろう。

引 用 文 献

Bers, S. S., & Rodin, J. 1984 Social compariosn jealousy : A developmental and motivational study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 766-779.

Bringle, R. G., & Buunk, B. 1985 Jealousy and social behavior. *Review of Personality and Social Psychology*, **6**, 241-264.

Clanton, G., & Smith, L. G. 1977 *Jealousy*. New Jersaey : Prentice Hall.

鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と，信頼性，妥当性の検討 教育心理学研究，**30**, 38-43.

岸田 秀 1987 嫉妬の時代 飛鳥新社.

Mathes, E. W., Adams, H.E., & Davies, R. M. 1985 Jealousy : Loss of relationship rewards, loss of self-esteem, depression, anxiety, and anger. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 1552-1561.

中村 薫 1986 孤独感の原因帰属に関する研究－自己の場合と他者の場合－ 心理学研究，**57**, 141-148.

奈須正裕・堀野 緑 1991 原因帰属と達成関連感情 教育心理学研究，**39**, 332-340.

Peterson, C., Semmel, A., Bayer, C., Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Seligman, M. E. P. 1982 The attributional style questionnaire. *Conitive Therapy and Research*, **6**, 287-300.

桜井茂男 1989 児童の絶望感と原因帰属の関係 心理学研究，**60**, 304-311.

Salovey, P., & Rodin, J. 1984 Some antecedents and consequence of social-comparison jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 780-792.

Salovey, P., & Rodin, J. 1986 The differentiation of social-compariosn jealousy and romantic jealousy. *Journal of Personality and Social Psy-*

chology, **50**, 1100-1112.

Salovey, P., & Rodin, J. 1988 Coping with envy and jealousy. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **7**, 15-33.

Shaver, P., Schwartz, J., Kirson, D., & O' Conor, C. 1987 Emotion knowledge: Further exploration of a prototype approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1061-1086.

Tesser, A., & Campbell, J. 1982 Self-evaluation maintenance and the perception of friends and stranger. *Journal of Personality*, **50**, 261-279.

Tesser, A., & Collins, J. E. 1988 Emotion in social reflection and comparison situations: Intuitive systematic, and exploratory approaches. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 695-709.

Weiner, B. 1986 *An attributional theory of motivation and emotion*. New York: Springer-Verlag.

Weiner, B., Frieze, I, H., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R. M. 1971 *Perceiving the causes of success and failure*. New Jersey: General Learning Press.

White, G. L., & Mullen, P. E. 1989 *Jealousy: Theory, research, and clinical strategies*. New York: Guilford Press.

（1992年6月22日　受稿
1992年12月5日　受理）